



RIFS通信

NUMBER
23

平成14年3月25日発行

■ 目次

1. 活動内容
2. 『国際交流の視点』
「グローバル化時代の日本-アジア関係」
3. 『研究・教育活動の紹介』
「川越学へのいざない」
4. 『国際を考える』
「中国の変身：これから中国に
どのように関わって行くか」

▼発展する中国の象徴－上海市浦東地区



活動内容



研究交流事業

- ・企業倫理研究会
平成13年12月8日、14年2月7日、3月1日
- ・国際化と開発教育研究会
平成13年7月27日
- ・日本交渉学会
平成13年11月20日、14年2月20日
- ・中東報告会
平成13年12月26日
- ・ISA (Inter-school Association)
平成13年11月24日、12月22日
14年1月26日、2月23日

広報・出版事業

- ・国際を考えるシリーズ第19号
「モンゴルの経済構造と開発戦略の課題」
- ・RIFS通信No.27

グローバル化時代の日本ーアジア関係

国際大学
国際関係研究科講師
査道炯

最近は、「グローバル化時代」が話題になることが多い。「グローバル化」は比較的新しい言葉であるが、実は世界の異なった人々が何世紀にわたって取引してきたプロセスそのものである。ある意味で、商品、貨幣、人間がある国から他へ移動し始めたときが、グローバル化の始まりだった。日本は、グローバル化という語が一般的の注目を集めること以前に大きな挑戦を受けている。少なくとも、この挑戦は海外から黒船がやってきたときに始まり、これらは外国の商品に加えて新しい宗教観をもたらした。現在は、西洋（米国、欧州）の商品と人々は、日本の日常生活の一部になって、日本人はこれらが新奇であると話し合うことすらない。

バブル経済の崩壊とともに、日本はもう一つの大きな挑戦を受けることになった。この度はアジアからやってきて、日本が永年得意としてきた分野、製造業と貿易、における挑戦である。経済産業省の2001年通商白書によると、東アジアの経済発展において、日本がエンジン役をする時代は終わった。この結論に至った知見について議論が必要だし、将来何が起こるかで判断されるだろう。日本経済は未だにデフレ状況にあるので、このような弱気が蔓延するのは理解できる。

西洋からの初期の挑戦とは異なり、今回のアジアからの挑戦は、合法あるいは非合法のアジア来訪者数が増加するということにも反映されている。地理的要因、歴史的つながり、とくに安価な外国人労働力への需要が、日本におけるアジア労働者の急増の原因である。アジア訪問者の増大でもっとも好ましくない点は、彼らによる犯罪の増加である。

ところで、日本政府は公的開発援助（ODA）を継続して、その受け手の大部分はアジア諸国である。しかし、日本のアジアとの関係については、一般の人々が理解できないことが多い。いったい、アジアは現在の日本にとって何であるか？ 私が日本に来て4年間働いている間に、しばしばこのような質問を受けた。多くの場合、このような質問は特定のアジアの国についてである。しかし、世界のどの国でも、一般大衆は自国と他国の関係について質問したりあるいは意見を差し控えたりすることに、留意しなければならない。

1990年代を通じて、日本の経済不況と大部分のアジアが成長したという対比は事実である。しかし、多くのアジア社会が急速な経済成長するために支払った代価は、おそらく日本社会がとうてい受け入れることができない。日本では従順を強調し平等を理想としているが、遅い改革のペースはむしろ「必要悪」になっている。外国人にとって、日本におけるいくつかの改革手段は、全くまとまっている。たとえば、日本道路公団改革の議論において、そもそも高速道路が誰のために造られたかについて、忘れ去られているのが不思議だ。通行料金があまりにも高いので、皆できるだけ使用せず一般道路が混み合っている。通行料金を下げれば、企業の輸送コストを下げ、部品や製品の配送速度を上げることができる。そして、通行する自動車の数が増えれば、道路公団の累積収入は増える。これ以上経済全体にとって良いことはないようだ。

外国人労働者の流入は、日本では長い歴史がある。社会的認知がなければ、合法的な外国人労働者でも在住が困難であり、どの国でも状況は同じである。外国人の数が増えて、とくに合法的に入国した人たちが犯す犯罪が増えると、本格的に苛立ちが増す。犯罪発生の原因是、個人的および社会環境面の両側面がある。この対策としては、外国人労働者が入国を許可される前の選定プロセスを改善することだろう。さし当たって、外国人労働者に新しい社会での行動規範を教えるとともに、敬意と尊厳をもって当たることが重要である。異文化間および異人種間で、相互理解と認識を達成することは、言うは易く、行うは難しい。日本人が、対人コミュニケーションで遠回しと抑制を好みのは、残念ながらそのギャップを埋めるのには、必ずしも有効ではない。

日本がグローバル化と競争の時代にあるという認識が強まると、日本とアジアの関係を考える上で、多くの難しい問題が出てくる。しかし、長期的な見方にたてば、今日の挑戦を考えることはそれほど苦しいことではなく、人々がよりよい未来を切り開くのをずっと容易にするだろう。

（査道炯博士：中国出身。米国ハワイ大学博士課程を修了後、ハワイ大学、マカオ大学、宮崎国際大学講師を経て1999年から現在まで国際大学大学院・国際関係研究科講師。

主な著書に*China's International Relations in the 21st Century: Dynamics of Paradigm Shifts*（共著）などがある。政治学博士）（原文は英文）

「川越学」へのいざない

人間社会学部助教授 森田 希一



人間社会学部では、「川越学入門」(「比較文化特講」の枠)という授業を、1999年度より実施している。

なぜ、「川越学入門」なのか。東京国際大学は「小江戸」といわれる歴史と伝統のある街、「川越」に存在する。その地に開学してもう35年余りになる。しかし、ほとんどの学生が自分たちの学んでいる川越をあまり知らないままに卒業していく。外国にいって自分の大学のある街を説明しようとして、実は川越について何も知らなかったことに気づく。

しかし、自分たちが毎日過ごしている土地の生活や文化を学ばないで、歴史とか文化に対する本当の認識は生まれてこないであろう。

そこで、川越あるいは埼玉県についてもっと積極的に目を向け、自分たちが今まで知らなかったその歴史と文化を知ることで、「あれっ、川越ってこんなところだったんだ」というような新鮮な驚きと、「もっと知りたい」という新たな問題意識が学生の中に芽生えてくれればという思いから、この授業はスタートしたのである。

とはいものの、「川越学」がどんな学問で、どのように成立するのかについては、未知の部分である。したがって毎回、大学の内外よりいろいろな専門分野の方に来ていただき、川越あるいはひろくは埼玉県について、自由に語ってもらう形にしてきた。また、過去の歴史、伝統に着目する内容だけでなく、現代、未来の川越も射程にいれた講義をアレンジした。

ここで、3年間行ってきた授業の主なタイトルをいくつか紹介してみたい。(括弧内は講師名)

川越学への招待(松平 誠)

歴史的都市としての川越を考える(長谷 敏夫)

女性からみた川越／青い眼からみた川越(前田 ジョイス)

古代の街道と入間郡(小川 良祐)

霞ヶ関と砂利運搬鉄道／東武東上線入間川鉄橋の産業遺産(玉川 寛治)

インターネットでみる川越(桑原 政則)

日米サツマイモ食文化と川越(ベリー・デュエル)

福沢桃介と渋沢栄一(森田 希一)

川越と佐原(丑野 毅)

川越の環境と市民(下羽 友衛)

中国の野菜たち一身近な私達の野菜との違い(瀧 満里子)

川越の福祉について(荻野 光彦)

川越の地域メディアとネットワーク(平野 直樹)

東京国際大学の36年—川越からオレゴン、そして世界へ(高橋 宏)

さて、以上が3年間の授業のおおまかな内容である。各先生が持ち味を發揮してくださり、視聴覚教材を駆使し、ときには試食もあったり、わかりやすく話をしてくれた。

3年目(2001年度)は、学外見学を行った。前期は川越市内散策を、後期は関東の代表的な祭りともいえる、「川越祭り」を見学した。川越市内散策後、レポートを提出してもらった。川越の古い伝統文化、歴史的側面だけでなく、駅周辺の開発、マンションの建設などベッドタウンとしての現代の川越の表情も意識した、広い視野での川越像を多くの学生たちがとらえていた。

毎年、授業終了時には、学生たちに授業評価をしてもらつた。「今後もこのようなスタイルの授業を続けていくべきですか」という質問には、ほとんど全員が「はい」と答えてくれた。授業担当者としては、大変嬉しいことであった。

担当者として感じたことは、学生の側からの質問がもう少し欲しかったことである。毎回講師がかわり、はじめて接する内容が多かったためか、ややおとなしそうな気がした。しかし、レポート「私の川越学」(川越をテーマに自由にレポートする)という課題に対しては、非常に質の高いものが続々提出され、ここで紹介できないのは残念だが、この授業をきっかけに学生の学習意欲の高まりが感じられた。

来年度(2002年度)は、担当者が代るが、その先生が持ち味を發揮して、一層面白い展開にアレンジしてくださることだろう。

協力して下さった多くの先生方に感謝の意をあらわすとともに、学生諸君にはこれをきっかけに、川越や埼玉県に、一層の関心をもってもらえればという気持ちである。

【参考文献】

- ・森田 希一 「川越学へのいざない」
『ジンシャマガジン』No.2 2001年3月 東京国際大学人間社会学部編

中国の変身：これから中国にどのように関わって行くか

● ●

経済学部教授／国際交流研究所所長 橋田 坦

日経流通新聞によれば、2001年のヒット商品番付の東横綱は「Made in China」だそうだ。21世紀に入って、中国がいよいよ日本経済に堂々と登場してきた。中国は元来政治の国であって、日本人にとっては、「大躍進」、「文化大革命」、「天安門事件」、「法倫功」といった、どちらかといえばマイナスのイメージが強かった。

しかし、90年代は中国にとって政治よりも経済の時代であった。多くの途上国が経済的困難に面した中で、中国は一貫して高度成長を達成し、国力を増強してきた。1997年の東アジア金融危機でさえも、中国にはほとんど影響を与えていない。2001年以降、世界経済の停滞によって、さすがに中国の経済成長が低下しているが、まだ年率7%の成長を議論する余裕がある。そして、2001年末のWTO加盟は、世界が中国の経済力を再認識する契機になった。

中国経済の台頭でもっとも影響を受けるのは、周辺諸国・地域である。香港は、すでに大陸経済に呑み込まれて、その窓口機能を果たすにすぎず、台湾は、90年代に華南や華東に大投資を行って、すっかり空洞化してしまった。現在韓国が中国ブームの最中にあって、いずれその影響下に入るだろう。そして、日本は安価で優れた製品が大量に流入する「ユニクロ現象」に驚き、「Made in China」の輸入急増に対するセーフガード発令を議論する一方で、企業の中国進出によって国内の空洞化が進行している。

我々の身辺には物としての中国は溢れているが、これからは現代思想としての中国が流入してくるだろう。すでに、大学は中国人留学生が溢れています、中国的発想にとまどうことが多い。たとえば、計画性がない、やり方がおおざっぱである、個人主義である、などマイナス面ばかりだ。しかし、よく考えてみると、これらは日本人の短所をすばりと教えてくれる。たとえば、議論ばかりして計画が作成できない、計画通り実現することはない、物事を行う場合に「木を見て、森を見ない（細部にこだわり、全体観を失う）」、集団主義で自己を喪失する、などなど。

忘れてならないのは、国際的な交流は一方向ではあ

り得ないことだ。中国も、日本を含めた外国とのつきあいの中で、しっかりと学んできた。1980年代の「Made in China」と、現代のそれでは天と地の差がある。この間、中国は外国の技術、経営などの基本にある考え方を吸収してきた。WTO加盟は、その動きを加速するだろう。法制度などを国際基準に合致させることが求められるからだ。その一方で、外国も中国をより深く学ぶことを余儀なくさせられる。

日本は中国を学んできたかどうかについては、議論が分かれる。少なくとも、古い中国に関してはかなりの程度学んでいて、歴史、文学、美術などの専門家も多いし、多くの一般の人々も強い関心を寄せている。しかし、近代から現代になると、日本の侵略戦争もあってこの時期は暗い悲しい話題が多くて、一般の人々を遠ざけている。はっきり言って、中国も日本に対してこの時期の歴史を強調しすぎた。重苦しい中国のイメージが日本の一部に存在する。

実のところ、中国は1990年代に大きく変身したのである。社会主義ばかり語っていた人々が、市場経済に目覚めて金儲けに向かい、結果として人々は豊かになるし、また顔色も明るくなった。所得格差の拡大や腐敗の話はいくらもあるが、暗い政治の話よりもまだましだ。最近、日本の若い人々の間に「中国は元気が出る場所」、という明るいイメージが出てきたのは同慶の至りである。元気が出てくる源は、構造改革と規制緩和の結果としての競争であって、日本が社会主義国に見えるほど激烈である。

日本は、中国からは競争のやり方を学んで、経済、社会に元気を取り戻さなければならない。